

「《主よ、彼らに永遠の休息を与えたまえ！》」

— ルイーダ・ピランデッロ 『一年間の物語』より (四) —

尾 河 直 哉

《REQUIEM AETERNAM DONA EIS, DOMINE !》

Traduzione giapponese di *Novelle per un anno* di Luigi Pirandello (4)

NAOYA OGAWA

キーワード

現代イタリア文学 (letteratura italiana contemporanea) / シチリア島 (Sicilia) / シチリア民衆文化 (cultura popolare siciliana) / ルイーダ・ピランデッロ (Luigi Pirandello) / 短編小説 (novella)

「主よ、彼らに永遠の休息を与えたまえ！」

十二人だった。男が十人、女が二人。同伴の司祭を含めれば十三人である。

控えの間は同じように待っている人でごったがえし、全員が座れるだけの椅子は見つからなかった。立ったまま壁にもたれかかって

いるのが七人。残り六人がその前で椅子に腰掛けていて、うち二人の女は両側から司祭をはさんでいる。

女は泣き、黒い肩当てを引つ張って目許を拭っていた。十人の男たちも司祭も、涙ですっかり顔を光らせている。女の脳裏にとつぜんあれこれ浮かんで来て、それまで抑えてきた涙が堪えきれずに息せき切つて溢れ出してきたそのすぐあとだった。男たちにも女たちの脳裏に浮かんだものがすぐにわかったのだ。

「さあさ…ね…」司祭がそれとなく宥める。だが気持ちの高ぶりで喉の詰まったような声だった。

女たちは少し頭を持ち上げると、涙で真っ赤になった目を開け、おずおずと不安な眼差しであたりを素早く見回す。

司祭を含め全員から肥料のべとつくような臭気が入り交じった山羊の臭いが漂ってきて、それがあまりに強烈なため、そこで待って

いる他の人たちは胸がむかむかして顔をしかめたり鼻にしわを寄せたりしていた。頬をふくらませ、聞こえよがしに息を吐き出す者もいる。

しかし彼らはそんなことを気にしてはいなかった。自分たちの臭いだから、そもそも気づくこともない。それは生活の臭いだった。牧草地の家畜や労働用の動物に入り交じり、太陽に焼かれたわずかの水もないはるか遠くの畑で染みついた臭い。渴きで死なないうためには、毎朝、雌ラバに乗ってはるか遠く、谷あいのどん詰まりにある泥沼まで行かなければならない。そんななかで、体を洗うためにどれだけの水が使えるか想像してほしい。それに大急ぎでやってきて汗もかいている。しかも、怒りに襲われているためか、まるで彼らの野蠻さを際立たせるように、にんにくのようなつんとくる臭いが発散されていた。

もし今かりにこうした下品なふるまいに気づいたとしても、むしろ周囲の人々の方が結束して自分たちに打撃を与えようとしていると思つたにちがいない。

彼らは、高いところにある岩だらけのマルガリ領の出身で、前日からここにやってきていた。司祭はふたりの女にはさまれて昂然と頭を上げ、他の十人はかたまつて後ろに控えている。

未加工の皮に鋏を打つたどしりして滑らかな狩猟靴が発するくぐもつた聲音の下で、道路の石畳は陽の光をひねもすきらきらと弾き返していた。

何日もかまわないために無精髭が突き立った農民らしい険しい顔、陰気で辛い苦しみばかりを見つめてきた狼のような目からは、怒りをかろうじて抑え込んだ獷猛な表情がうかがえる。過酷な必要性に急ぎ立てられ、もはや狂気にしか逃げ道がないほど追いつめられているようだった。

彼らは市長、市議員、市会議員のところを相次いで回つたが、こうしてまた県庁に戻ってきていた。

前日、県知事は彼らを頑として受け入れようとしなかった。しかし、彼らが声をそろえて泣いたり、怒声を発したり、猛り狂つた身振りや嘆願と脅迫を繰り返しながら、地主に対する要求を評議員代表に伝え、この評議員代表が市長も、自分たちも、県知事も、大臣閣下も、いや、国王陛下でさえあなたたちの要求を満足させる権限を持っていないと躍起になって説明しても、相手がいつか聞き入れなかったため、最後にはやむなく、その日の十一時、地主のマルガリ男爵臨席のもと県知事が謁見する旨約束する羽目になつてしまつたのである。

約束の十一時はすでにずいぶん前に過ぎ、あと少しでお昼の鐘がなるころになつていたが、男爵はまだ姿を見せていなかった。

知事と謁見予定の部屋はそのあいだもドアが閉じたままで、他に待つている人たちを中に入れる気配もなかった。

「客人がいらしております」、と案内係の役人が繰り返す。

ついにドアが開いて、堅苦しい挨拶を交わしたあと出てきたのはマルガリ男爵その人だった。大きな顔を紅潮させ、ハンカチを手にしている。ずんぐりした腹を出し、靴をキュッキュときませながら評議員代表と出てきた。

腰掛けていた六人が飛び上がり、二人の女は金切り声をあげた。勇敢な司祭が前に進み出て、うるたえながらも大げさな口調で言った。

「しかしこれ……これは裏切りですよ！」

「サルン神父！」と、開いたままのドア口から案内係りの役人が大声で呼んだ。

評議員代表が司祭の方に振り向く。

「さあご返事を聞ける番がまわってきました。お入り下さい。神父さまだけです。みなさん、お静かに、落ち着いてください！」

司祭は動揺し、気が動転して、この呼び出しに応じて急いで駆け

つけるべきか否か途方に暮れた。その傍らで、司祭に劣らず動揺、動転した一同は、あまりにひどいと怒りの涙を流しながら訊く。

「で、おれたちは？ おれたちはどうなるんだよ？ 返事をくれるのか？」

それから大騒ぎになり、みながめいめい勝手に大声で怒鳴りはじめた。

「おれたちや墓地が欲しいんだ！」「これじゃ洗礼を受けた肉のかたまりじゃないか！」「知事さま、わしら死んだら雌ラバの尻のうえじゃ！」「屠殺された獣みたいにな！」「死者に休息の地をお与えください、知事さま」「おれたちの入る墓穴が欲しい！」「自分の骨を埋めるだけのちっぽけな土地ですよ！」

そして女たちは滂沱の涙に暮れながら言った。

「わたしたちの父親が死にそうなんです！ 自分のために掘らせた墓穴で眠ることができるのか、わたしたちの土地の草葉の陰で眠ることができるのか、知りたがっています。その父親のためにも、どうか！」

すると司祭が知事室のドアの前で両腕を上げるとだれよりも大きな声で言った。

「キリスト教徒として最後の哀願です。レクイエム アエテルナム ドナ エイス、ドミニネ！（主よ、彼らに永遠の休息を与えたまえ！）」

この大騒ぎに雇われ番兵があちこちから駆けつけ、戸口から発する知事の命令を受けて、無関係な人たちまで一緒くたに蹴散らして控えの間から階段にむりやり追い立てた。

こうして泣きわめく人々が知事の邸宅からどっと追い出されてきたのを見て、目抜き通りはたちまち黒山の人だかりになった。怒り心頭に発し興奮したサルソ神父は、あちこちから浴びせられる要求に押されて、海で遭難したように頭の上で腕を振ると、まあ待ってください、これから話しますから、と頭と手で合図した。い、いま

しがた……ええと……お静かに、もう少し下がって……当局に追い出されまして……ええと……みなさんに、みなさんに……

と云って、司祭は群衆を前に演説を始めた。

「キリスト教徒のみなさんに、神の名においてお話ししたいと思います。神は人が誇るいかなる掟も超越し、あらゆる人とこの世の土地すべてを続べたもうお方だからだからです。われわれはただ生きるためだけにこの世にあるわけではありません。生きて死ぬためにあるのです！ もし人の不法な掟が、足を乗せ『ここはおれのものだ』と言えるようなわずかな土地さえ貧しい暮らしを送る者に禁じるとしても、死に瀕した者に墓穴の権利を禁じることなどわたしにはできません。キリスト教徒のみなさん、こうした不幸な四百人を代表して墓地の権利を要求しているのが、ここにいる人たちのためです！ 彼らは墓を望んでいます。自分たちと死者たちのための墓を！」

「共同墓地だ！ 共同墓地を与えろ！」と、マルガリ領に住む十二人は拳を中空に突き出し、目に涙をいっぱい浮かべてふたたび唱和した。

群衆の狼狽から新たな勇氣をもらった司祭は、めいっばいつま先立ちになって群衆を制しようとした。

「ええと、よろしいですか、ここにおいでの子キリスト教徒のみなさん。こちらにいらつしやるふたりの女性は……あれ？ どこにいったのかな。手を挙げて！ ああ、いたいた。このふたりの女性の父親は、われわれ全員の父親でもあれば頭でもあつて、わが村落をお造りになった方ですが、その方がいままも息絶えなんとしています！ とここで、この男、今や息絶えなんとしているその男が岩だらけの山腹を登りマルガリの領地までやってきて、手ずから葦と粘土で最初の家を建ててはや六十年。当地の家屋もいまでは百五十軒を数えるまでになりました。百四十軒以上に人が住んでおりますが、隣村までなんと七マイル近くも離れております。父親や母親、

妻や息子、兄や妹が亡くなると、村人はだれでも、身内の遺骸を雌ラバの背に載せて運ぶという責め苦を味わわなければなりません。棺のなかで遺骸をガタガタいわせながら険しい岩山を何マイルも運ばねばならないのです！ しかも、ラバが足を滑らせた拍子に棺が真つ二つに割れ、死者が石ころのあいだや川底の泥のなかに飛び出すことだって一度や二度ではありません！ こうしたことが起こるのも、みなさん、わが小村が見下ろす土地の隅に死者を葬り、眼下に引き留めて弔うのを許してほしいという申し出を、マルガリ男爵が残酷にも拒否しているからなのです。われわれは今までこの残酷な主人に手を合わせて頼んだり哀願したりすることもなく、かといつて大声で訴えるわけでもなく、この苦しみに耐えてきました。しかし、みなさん、われわれ全員の父親が、われわれの長老が息絶えようという今このとき、彼が初めて点した火が多くの家で燃えているその場所に、はたして埋葬させてもらえるのか、どうしても知りたくてやってきたわけでありませぬ。われわれが求めているのは必ずしも法律に敵つた権利ではありません。しかしそれはにん…え？ どうした？ …ええ、にんげんの、にん…」

先が続けられなかった。番兵と憲兵の大群が群衆になだれ込み、叫び声、ホイッスル、拍手が入り交じつて大騒ぎになったあと、群衆は蹴散らされた。サルソ神父は代理人に腕をつかまれ、他の十二人のマルガリ村民とともに警察分署へ連行された。

いっぽうその間、騒ぎから身を引いて知人たちのおしゃべりに加わっていたマルガリ男爵は、司祭の尊大な演説によって醜聞が天下にさらされた重圧に徐々に押し潰されて息が詰まり、演説者に背後から飛びかかりたくて引き留める腕をいくどもふりほどこうとうした。やつと群衆が蹴散らされたので、土気色の顔をした男爵は、いままがた死ぬほどの大笑いをしたきたとでもいうように息を切らしながら出てくると、ますます集まる人々に囲まれたまま話し始めた。あいつらは、あのペテン師どもは、わたしを、わたしの前には

父親のドン・ライモンド・マルガリを、まるであいつらの墓地の権利を否定する冷酷無比な蛮族のように言っていたが、蛮族どころか、あのふたりの女の父親から六十年にわたつて篡奪を受けてきた犠牲者はむしろわたしたちの方だ。あの男は恐ろしい、あらゆる無法を秘めた底知れぬ淵だ。わたしは何年も前から自分の所有地に自由に行くことができない。やつらはあそこに家を、あの司祭は教会を建てたのに、税金も地代も払わず、ああしてわたしの所有地に侵入しているというのに、その許可を請おうとさえしない。わたしとしては、うちの農場監視人を犬のようにわんさか送り込んであいつらを追い出し、家をおつぶすことだってできるのに、これまでそうしてこなかったし、今なおそうしていない。あいつらが自由に暮らし、雌兎以上に子孫を増やしても、わたしは放つておいた。あの女たちはそれぞれ二十人もの子孫を産んでいる。あの村じゃ六十年たたないうちひと人口でできるだろう。ところがだ、これだけじゃだめだ、あの暮らしじゃ満足できない、とあいつらは言うのだ。あの司祭め、あいつらの陰に隠れて暮らし、教会の維持費をみんなに課してきたくせに保護者面してあいつらをそそのかし、ここまで連れてきたつてわけだ。生きていてあいつらだけじゃなく、死んでもからもわたしの土地に居続けようつていうんだからな、ええ？ ダメだ！ そんなこと絶対にダメだ！ 生きてるあいだは面倒も見てやる。だが、死んだやつまで抱え込むなんて、そんな無茶苦茶は絶対に許さない！ それに、死者を受け入れたら、一緒にあいつらの勝手な要求も土地に根付かせることになつちまうではないか！ 知事はわたしの言い分を認めてくれた。それどころか、いかなる暴力沙汰も阻止すべく番兵と憲兵を送り込んでくれると約束してくれた。というのも、水腫でひと月まえから死にかかっているあの老人は生きてまます墓穴に埋められることになるだろうし、墓穴は、墓地の建設を夢見ている場所にすでに掘られているからだ。あのふたりの娘と例の司祭が建設拒否を老人に伝えたあとすぐにな。

事実、その日の午後、サルソ神父とその一味が釈放され、前日に離ラバを置きっぱなしにしておいた倉庫に行くとき、そこにはかなりの数の番兵と騎馬憲兵がいた。彼らに付き添って高いマルガリ領の村落まで行くという任務を負っている。

「またか？」サルソ神父は彼らを見ると体が震えた。「またか？なぜだ？ 兵隊に付き添われなければならないほど、わたしたちは下賤な人間なのか？ ああ、わかった：その方がいいだろう、きつと：おまえたちがわたしたちに手錠をかけたいなら！ さあ、出発だ！ 馬に乗ってくれ！」

まるで殉教にでも向かうようであった。自分がしたことを思うと誇らしく、この護送隊と村に着くのが待ち遠しかった。老人に墓地を得させるために自分がどれほど骨を折ったか、どれほどの熱烈に、どれほど激しくことに当たったか、護送隊が村の全員に証言してくれるだろう。

時刻はすでに遅かった。しかも彼らは前日の晩からいまかいまかと待っていた。老人がまだ生きているなんてだれが思っただろう！ だれもが心の底では老人の死を心待ちにしていたのだ。

「ああ、お父さん：愛しいお父さん！」と、ふたりの女性がすすり泣いた。

でも、どうせわからないなら死んでいく方がよい。そうならば、少なくとも共同墓地の認可を男爵から引き出せる希望が湧いてくるのではないか！

さあ、さあ、行こう：宵闇が帳をゆっくり下ろしはじめていた。帰りが遅くなれば遅くなるほど、上で待つ村人みんなの心にこの希望が根付き、膨らんでいってしまう。そして、それとともに、希望が裏切られたときの絶望もより深くなるだろう。

神よ！ 神よ！ 馬上のなんたる騒がしさ！ まるで軍隊の行進だ。こうして兵隊をたくさん引き連れて帰ってくるおれたちの姿を目にしたら、マルガリではどう思うだろう！

長老はすぐに気づいてしまっただろう。

老人はいまや死の際にあつた。自らの土地の上に椅子を置き、夜空の下、平屋の扉の前で座っている。水腫で恐ろしくむくんでいるため、ベッドに寝ることができないのだ。夜もこうして座ったまま、息も絶え絶え、星をじっと見つめていた。周囲を村人全員が取り巻いている。村人は、ひと月前から徹夜で老人を見守って倦むことがなかった。

せめてあの人にはこの番兵たちの姿を見せずにすませることができたら：

サルソ神父は、馬に乗って隣を進む准尉に言葉をかけた。

「少し後ろにいてもらうことはできませんか？」と准尉に頼む。「少し離れていてもらうことは？ できれば、あのかわいそうな老人にわれわれが譲歩を勝ち得たと思わせてあげたいんです！」

准尉はしばらく答えあぐねた。この司祭の言うことを信じちゃいけない。下手に同意しようものなら厄介に巻き込まれるぞ。そしてこう言った。

「司祭、後で考えましょう。着いてから」

だが、息を切らせながら何時間も歩いた後に山を登り始めると、あたりはすでにかなり暗くなっているにもかかわらず、遠くからでもこの奇妙な一群の姿はちらちら目に入ってきた。老人に善意の嘘をつき通すことができるとは、もはやだれにも思えなかった。

切り立った岩場の斜面には灯火がひしめいていた。まるで降誕祭のための九日間祈祷のときのように、藁束があちこちで燃え、炎を含んだ煙が夜空の星へと渦になって立ち上っている。しかもそこでは歌を、歌を歌っているのだ。燃え上がる炎に照らされて、それはそう、まさしく九日間祈祷だった。

なにごとが起こったんだ？ それ、馬を走らせろ！

そこには村人が全員集まり、まるで死者を弔う原始的な儀式でも行っているようであった。

しびれを切らし、待ちきれなくなった老人が、この息苦しさに早く終止符が打ちたくて、共同墓地予定地の、自分の墓穴の前に椅子を運んでくれと頼んでいたのである。

清められ、髪の毛を撫でつけられて、すっかり死に支度を済ませた老人は、いまや巨大な玉のような姿で喘ぎながら椅子に腰掛けていたが、その横には樅材の棺がすでに数日前から用意されていた。棺の蓋の上には黒い縁なし帽、ラシヤのスリッパ、これまた黒い絹のハンカチが折り畳まれて置かれている。ハンカチは死んだらすぐに顎の下に通して頭に括りつけ、口が開かないようにするためだった。要するに、どれも最後の身支度に必要な品々である。

周囲には灯りを手に村人が全員集まり、老人に向って連禱を唱えていた。

「サンクタ・デイ・ゲントリクス（神の聖なる母よ）」

「オラ・プロ・ノビス（われわれのために祈りたまえ）」

「サンクタ・ウィルゴ・ウィルギヌム（乙女たちの中の聖なる乙女よ）」

「オラ・プロ・ノビス（われわれのために祈りたまえ）」

そしてこのひしめく灯りに広大な空から応えているのは満点の星の煌めきであった。

老人の頭では、慣れない櫛でなでつけられまだ濡れたままのまばらな髪が、夜の涼風に吹かれてかすかに震えていた。むくんだ手をどうにか動かして重ねると、自らを勇気づけ、それによつて慰安を得ようとするかのように、ぜろぜろする喉からうめくような声を絞り出した。

「草だ……草……」

自分の土地から、そして間もなく自分が入る墓穴から草をむしり取ろうというのだろう。そして、濃青色の巨大な綿の靴下を履いた膀胱のようにむくんで歪んだ両足を、この墓穴に向かって伸ばした。

周囲で仲間が叫び声を上げた。サーベルをがちゃがちゃいわせて急勾配を駆け上がったくるあまりに大勢の騎馬隊を目にしたからだ。叫び声を耳にした老人はすぐに立ち上がろうとした。泣き声と、息せき切った闘入者の反応が聞こえてきた。事情を察した老人は頭から穴に飛び込もうとする。だがそれは途中で抑え込まれてしまった。兵隊たちから守ろうとするかのように、みんなが老人の周囲にぎゅっと固まったが、准尉はその人混みに割って入ると、すぐに瀕死の老人を家に運んで全員ここから立ち退くよう命じた。荷車に載せられた古代の聖人のように、老人は椅子に乗ったまま持ち上げられた。マルガリ村民たちは火を高く掲げると、泣いたり叫んだりしながら、岩場の高いところに白っぽく散在する自分たちのぼろ家に向かって行った。

うち捨てられたからっぽの墓穴と樅材の棺を見守るために、星空の下、宵闇に包まれて護衛が居残った。蓋の上にはあの縁なし帽とハンカチ、そしてあのラシヤのスリッパが置かれていた。

(この項、完)

(1) 初出は一九一三年二月十六日付『コッリエーレ・デッラ・デーラ』紙。

タヴィアーニ兄弟監督の『カオス・シチリア物語』の第四エピソード「レクイエム」はこれをベースにしている。ただし、①映画には、墓がなく死んだ赤子を町まで連れてくるというエピソードが挿入されている②陳情団の村人たちが待つ場所が違う（原作では県庁内らしいが、映画では県庁前の広場である）③映画では県知事と村の長との関係が示唆されている④映画には県知事の娘たちが登場する⑤原作では村の司教の役割が映画より大きい、などの諸点に違いがあり、全体的に映画の方が膨らみのある物語になっている。

底本には『REQUIEM AETERNAM DONA EIS, DOMINE!』 in Luigi

Pirandello, *Novelle per un anno*, a cura di Mario Costanzo, Introduzione di Giovanni Macchia, volume primo, tomo I, Arnoldo Mondadori Editore S.p.A., Vedizione, I Meridiani febbraio 1996, 480頁, 1,200円。